



筑紫女学園大学リポジット

フラウィウス・ヨセフスがネルヴァルの作品に与えた影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 公開日: 2024-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000004

フラウィウス・ヨセフスがネルヴァルの作品に与えた影響

間 瀬 玲 子

L'influence de Flavius Josephus sur les œuvres de Nerval

Reiko MASE

I. 序

19世紀の作家ジェラルド・ド・ネルヴァル（Gérard de Nerval, 1808-1855）が執筆した『東方紀行』（1851年）の作品内には「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」*Histoire de la Reine du Matin et de Soliman, prince des génies* が収録されている。この作品の第1章はアドニラム Adoniram（人名）である。過去の研究によるとアドニラムに影響を与えたのは、バルテルミー・デルブロ・ド・モランヴィル Barthélemy d'Herbelot de Molainville（略称デルブロ）の『東洋文庫』*Bibliothèque orientale*（1697）、旧約聖書の『列王紀』、そしてフラウィウス・ヨセフス Flavius Josephus 著、アルノー・ダンディー Arnauld d'Andilly 訳（1667）『ユダヤ古代誌』などであると言われてきた。⁽¹⁾ しかしネルヴァルのプレイヤッド版では、「アドニラム」は聖書に登場するヒラムからヒントを得たと書かれている。⁽²⁾ またガルニエ社から刊行されているネルヴァル全集においても、アドニラムは聖書のヒラムからヒントを得たと書かれている。⁽³⁾

そこでネルヴァルの文章と『ユダヤ古代誌』の該当する文章を比較検討することにより、どちらの説が正しいのかを検証したいと考えた。

なおネルヴァルがフラウィウス・ヨセフスを作品内で言及したのは以下の文章である。

《 Madame, avez-vous lu le siège de Jérusalem, dans *Josèphe* ?

《 — Oh ! sans doute ; qu'est-ce qui n'a pas lu ça ? Mais faites comme si je ne l'avais pas lu.

《 — Eh bien ! madame, pendant ce siège, un homme fit sept jours de suite le tour des remparts, à la vue des assiégeants et assiégés, criant incessamment d'une voix sinistre et tonnante : *Malheur à Jérusalem ! Malheur à moi-même !* Et dans le moment une pierre énorme, lancée par les machines ennemies, l'atteignit et le mit en pièces. ⁽⁴⁾

「奥様、あなたはヨセフスの本でエルサレムの包囲を読みましたか？」

「おお、きっと。誰があれを読まなかったのでしょうか？しかし私があれを読まなかったこと

にしてください。』

「ところで、奥様、この包囲の間にひとりの男が7日間城壁の間を回り、包囲軍と籠城軍の前で不吉で雷のような声で「エルサレムに災いあれ！ 私自身に災いあれ！」と絶えず叫びました。すぐに敵の投石機から投げられた巨大な石が彼にあたり、彼を粉々にしました。⁽⁵⁾

上記の文章はネルヴァルの『幻視者』*Les Illuminés* に収録された「ジャック・カゾット」*Jacques Cazotte* の一節である。引用文はカゾットとグラモン公爵夫人とのやり取りである。

この2名だけの会話ではなく、数名が非常に危険な話題を議論している。カゾットは18世紀(1719-1792)の作家で、主要作品は『恋する悪魔』*Le Diable amoureux* である。ネルヴァルのブレイヤッド版の注には以下のように二つの著作を紹介しているだけである。

Flavius Josèph, historien juif du premier siècle après Jésus-Christ, auteur des *Antiquités judaïques* et de l'*Histoire de la guerre des Juifs contre les Romains et de la ruine de Jérusalem*.⁽⁶⁾

フラウィウス・ヨセフス、紀元1世紀のユダヤ人歴史家、『ユダヤ古代誌』と『ユダヤ戦記』の著者。

そこで後で詳述するヨセフスの『ユダヤ戦記』を調べると日本語訳第3巻に次の記述があることがわかった。『ユダヤ戦記』(原典)第6巻・第5章・306節から309節の一部を引用する。

以後この男は戦争の勃発まで、市民に接触することはなく、また話しているのを目撃されることもなく、毎日祈りでも唱えるかのように、「エルサレムに呪いを！」と悲しみの言葉を繰り返していた。(中略)最後に「そしてわたしにも呪いを！」と口にしたとき、投石機から発射された石弾が命中して即死したからである。⁽⁷⁾

該当する306節から309節は文庫本の約1ページ分である。引用はその一部である。ネルヴァルは7日間と書いているが、『ユダヤ戦記』では7年と5ヶ月と書かれている。そしてこの男の名は『ユダヤ戦記』ではイエスと書かれている。なお『ユダヤ戦記』ではイエスという名前の人物が複数回登場する。

さてこれでネルヴァルがフラウィウス・ヨセフスの著作の存在を知っていたということが証明されたと考えている。しかし二つの著書の全文を読んだかどうかまでは立証したわけではない。

II. 『ユダヤ古代誌』及び著者ヨセフスについて

『ユダヤ古代誌』の著者はフラウィウス・ヨセフス(ラテン語表記を日本語表記化)である。紀

元37年に生まれ、100年に亡くなった政治家であり、著述家である。ユダヤ戦争の指揮官であったが、ローマ軍に投降した。ヨセフスはその後エルサレム陥落を目撃した。

主要著書は以下のとおりである。

1) 『ユダヤ戦記』(75-80)。紀元66年—70年、ユダヤ人たちはローマ帝国と戦った。ユダヤ人の都エルサレムの神殿は失われた。ヨセフスはこの戦争を克明に記録した。諸説はあるがギリシア語で書かれたとされている。日本語訳は秦剛平氏訳により筑摩書房のちくま学芸文庫として刊行された。翻訳の底本は、ロウブ古典文庫『ヨセフス全集』に収録されている「ユダヤ戦記」のギリシア語テキストである。なお詳しく書くと第1巻と第2巻は新たに訳されている。第3巻だけは山本書店より出版された本を大幅に改訳したものである。

『ユダヤ戦記』第1巻 底本のⅠ・Ⅱ巻

(訳者はしがき、ヘロデ家系図・関連地図が収録されている)

『ユダヤ戦記』第2巻 底本のⅢ・Ⅳ・Ⅴ巻

(関連地図が収録されている)

『ユダヤ戦記』第3巻 底本のⅥ・Ⅶ巻

(関連地図、ユダヤ史を中心とする年表、訳者解説、訳者あとがき、索引(人名、地名その他)が収録されている。)

本書は本論文で論じるネルヴァルの『東方紀行』に収録された「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」とは直接関係はないと考えている。

2) 『ユダヤ古代誌』(95年頃)。本書はまずギリシア語で発表されたとされている。天地創造から対ローマのユダヤ戦争までを描いている。日本語訳はまず秦剛平氏訳により山本書店から出版され、次に再編集され筑摩書房、ちくま学芸文庫によって広く世に出るようになった。⁽⁸⁾ 『ユダヤ古代誌』日本語訳(ちくま学芸文庫)は6巻からなっている。巻の数字は底本に準拠している。

『ユダヤ古代誌』第1巻 旧約時代篇 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 巻

(秦氏による「フラウィウス・ヨセフス、そして『ユダヤ古代誌』」が収録されている。66年から70年のユダヤ・ローマ戦争の状況が書かれている。この戦争におけるヨセフスの立ち位置も書かれている。本論文の序で引用したネルヴァルの文章の歯切れの悪さは、ヨセフスのこの戦争における行いと関係があるのかもしれない。)

『ユダヤ古代誌』第2巻 旧約時代篇 Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ 巻

『ユダヤ古代誌』第3巻 旧約時代篇 Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ 巻

(本論の主題と深く関わるのが第8巻の「ソロモン物語」と「ソロモンの神殿と王宮」である。)

『ユダヤ古代誌』第4巻 新約時代篇 Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ 巻

(関連系図・地図が収録されている)

『ユダヤ古代誌』第5巻 新訳時代篇 XV・XVI・XVII 巻

(関連系図・地図が収録されている)

『ユダヤ古代誌』第6巻 新訳時代篇 XVIII・XIX・XX 巻

(関連系図・地図、訳者解説、訳者あとがき、地名その他索引、人名索引が収録されている。訳者解説においてソロモンが悪鬼に抗する術を神から与えられたという話が紹介されている。またツロのヒラムが神殿建築用の資料等の提供をソロモンに申し出た話も書かれている。)

すでに記したように上記の6巻の中で本論文に深く関係があるのは『ユダヤ古代誌』3巻のVIII章の「ソロモン物語」と「ソロモンの神殿と王宮」である。6巻の巻末についている人名索引によるとアドニラムという人名は、VIII(底本の巻)の59(底本の章)の1箇所にしかなら記載されていない。『ユダヤ古代誌』ではソロモンは重要人物である。しかしアドニラムはソロモンの徴募の監督官として登場するだけである。この点に関しては後で詳しく記述したいと考えている。

Ⅲ. ネルヴァルが参考にした可能性がある『ユダヤ古代誌』のフランス語訳について

19世紀前半のフランスの作家であるネルヴァルが『ユダヤ古代誌』のギリシア語版を参考にしたとは考えられない。そこでネルヴァルは『ユダヤ古代誌』フランス語訳を参考にしたと考えた。

フランス国立図書館の検索機能を使ってフランス語訳を検索した。その結果同図書館電子テキストサイト Gallica でダウンロード可能な本をいくつか見つけることができた。consulter en ligne (オンラインで調べる) と表記されているが、アクセス不能な電子テキストも存在している。そこで以下の電子テキストを本論文で引用することにした。なおフランス語表記は現代のフランス語表記に変更している。残念ながらパリで出版された本の電子テキストは Gallica からはダウンロードが出来なかった。

Flavius Josèphe, *Histoire des Juifs*, sous le titre de *antiquités judaïques*, traduite sur l'original grec reveu sur divers manuscrits, par Monsieur Arnaud d'Andilly, Amsterdam, Pierre Mortier, 1700.⁽⁹⁾

フラウィウス・ヨセフス、『ユダヤ人の歴史』副題『古代ユダヤ』多くの草稿を再検討されたギリシア語版のオリジナルをもとにしている、アルノー・ダンディー氏によって翻訳されている、アムステルダム、ピエール・モルチエ社、1700年。

上記の版以外の電子テキストも探してみた。現時点でわかったことはアルノー・ダンディー訳が出版界で流通していた。本によっては注、年代記、地図、自伝が収録されている版もある。ダンディー氏は1589年に生れ、1674年に亡くなった。彼は詩人、作家、そして翻訳者であった。また当

時の宮廷の仕事にも関与している。つまり政治家でもあったとされている。ダンディー氏が『ユダヤ古代誌』の翻訳を公表したのは1667年だとされている。

IV. ネルヴァルの「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」とヨセフスの『ユダヤ古代誌』の比較

すでに言及したように、ネルヴァルが特に影響を受けたのは、『ユダヤ古代誌』第8巻・1章から7章の「ソロモン物語」「ソロモンの神殿と王宮」である。ネルヴァルの記述（以下「暁」と略す）を先に引用し、次に『ユダヤ古代誌』日本語訳、最後にフランス語訳の一節を引用する。フランス語訳には日本語訳をつけることにする。

(1) アドニラムの役割

アドニラムがどのような役割を果たしたのかを表す文章は「暁」の第1章 アドニラムの冒頭である。

Pour servir les desseins du grand roi Soiman-Ben-Daoud, son serviteur Adoniram avait renoncé depuis dix ans au sommeil, aux plaisirs, à la joie des festins. Chef des légions d'ouvriers qui, semblables à d'innombrables essaims d'abeilles, concouraient à construire ces ruches d'or, de cèdre, de marbre, et d'airan que le roi de Jérusalem destinait à Adonai et préparait à sa propre grandeur, le maître Adoniram passait les nuits à combiner des plans, et les jours à modeler les figures colossales destinées à orner l'édifice.⁽¹⁰⁾

偉大なる王ソロモン・ベン・ダウドの構想に奉仕するために、彼の家来のアドニラムは10年以來、睡眠、快楽、宴会の喜びを諦めた。エルサレムの王がアドナイのために、また自分の偉大さのために準備した黄金、ヒマラヤ杉、大理石、青銅の場所を建設するために、無数のミツバチの蜂の群れのような多数の働く人の監督アドニラムは設計図を組み合わせるために夜、建物を飾るべき巨大な像をかたどるために昼を過ごしていた。⁽¹¹⁾

ネルヴァルの「暁」ではアドニラムが偉大な王ソロモンの信頼が厚く、またアドニラムはその信頼に応えるために、10年間ありとあらゆる楽しみを諦め、昼夜を問わず働いたことが重要な点である。冒頭から青銅が登場することも特記すべきである。次に秦氏の日本語訳8巻・2章（底本は8巻・2章）を引用する。

この徴募の監督官はアドニラムであった。⁽¹²⁾

それでは次に『ユダヤ古代誌』フランス語訳 8巻・2章の一節を引用する。なおこの引用文のページには神殿の図版が収録されている。読者はこの神殿がいかに壮大な建築物であったかを容易に理解できるようになっている。

L'intendance de cet ouvrage fut donnée à *Adoram*.⁽¹³⁾

フランス語訳では *Adoram* と記載されている。フランス語訳を日本語に翻訳すると以下のようになる。

この建設の監督はアドラムに与えられた。

ギリシア語版からの日本語訳においてアドニラムの役割は徴募の監督官である。しかしギリシア語版からのフランス語訳では建設の監督が与えられたと書かれている。徴募と建設では意味合いがかなり違う。秦氏の日本語訳ではソロモンが絶対的の権力により、神殿建設計画をたてて自ら実行したことになる。しかしダンディー氏によるフランス語訳ではソロモン王は部下であるアドニラムに建設の監督を命じている。どちらにしてもアドニラムは一度しか登場していない。もしネルヴァルが『ユダヤ古代誌』を読んだとするならば、フランス語訳ということになる。なぜならば、「暁」においてアドニラムは悩みながらも王の命により、神殿建設を実行するからである。ギリシア語版のように、働く人を集めるだけの役割ではないことは確かである。ネルヴァルはギリシア語版を見ていない証拠の一つを見つけたと考えている。

(2) 青銅の海

次に青銅の海またはそれに類する「暁」の記述を探すことにする。以下の引用は「暁」の冒頭からかなり近い箇所に書かれている。

Il avait établi, non loin du temple inachevé, des forges, où sans cesse retentissait le marteau, des fonderies souterraines, où le bonze liquide glissait le long de cent canaux de sable...⁽¹⁴⁾

彼（アドニラム）は未完成の神殿から遠くないところに鍛冶場を作った、そこでは絶えず槌の音が鳴り響いていた、また地下の鑄造所を作った、そこでは液体の青銅が100本の砂の運河に沿って滑るように進んでいた。

それでは秦氏の日本語訳を見て見よう。底本の8巻・3章の一節である。秦氏による日本語訳には青銅の「海」と書かれている。

ソロモンは青銅を鑄て半球形の「海」を造った。この青銅細工は巨大なために「海」と呼ばれた。⁽¹⁵⁾

次に関連する秦氏の日本語訳を続けて引用する。上記の引用の数ページ後の文章である。

「海」には水が入れられて満杯にされた。祭司たちは、神殿に入場して祭壇に上って行く前に、「海」で手足を洗い潔めるよう定められていた。⁽¹⁶⁾

上記の2つの引用に対応するフランス語訳の一部を引用してみよう。ただし日本語訳との違いは8巻・2章の一節だということである。

On mit en ce même lieu ce grand vaisseau nommé la mer, destiné pour servir à laver les mains et les pieds des Sacrificateur lors qu'ils entraient dans le Temple pour y faire des sacrifices...⁽¹⁷⁾

上記の引用文を日本語に訳すと以下のようなになる。

この同じ場所に海と名付けられているこの大きな容器が設置された、それは祭司長（ユダヤ教）の手や足を洗うのに役立つためである、彼らがそこで捧物をするために神殿に入る時である。

まず秦氏の日本語訳とフランス語訳になぜ違いが生じたかを簡単に考察してみることにする。それはすでに上記で記したように、フランス語訳の表紙に「多くの草稿を再検討した」と書かれていることが原因だと考えている。要するに日本語訳とフランス語訳の底本には違いがあると推測している。

(3) エジプトとエチオピアの女王

さて「暁」において最重要人物はアドニラムであり、その主君であるソロモンである。そして最後の重要人物がエジプトとエチオピアの女王である。それではまずネルヴァルの「暁」の該当する文章を引用しよう。

En un mot, maître, la reine du midi, la princesse d'Yémen, la divine Balkis, venant visiter la sagesse du seigneur Soliman, et admirer les merveilles de nos mains, entre aujourd'hui même à Solime.⁽¹⁸⁾

一言でいうと、先生、南国の女王、イエメンの王女、神のようなバルキスが主君ソロモンの知

恵を探り、私の手にある奇跡を賞賛しようとやって来て、今日まさにサレムに入ります。

ネルヴァルの「暁」に近い描写を秦氏の日本語訳で探してみた。8巻・6章である。サブタイトルは「エジプトとエチオピアの女王、ソロモン王のもとを訪ねる / 女王、ソロモンの知恵をためす」である。

(前略) ついに彼の所へ赴く決心をした。そして彼女は自分で難問を出してソロモンに解答を迫って、彼の知恵を是が非でも試みようと思ひ込み、仰々しい一行をしたがえ、大量の富を携えてエルサレムに入場した。¹⁹⁾

それではこれに該当するフランス語訳を探してみた。こちらは8巻・2章である。

Nicaulis Reine d'Égypte et Éthiopie qui était une excellente Princesse, ayant entendu parler de la vertu et de la sagesse de Salomon, désira de voir de ses propres yeux si ce que la renommée publiait de lui était véritable...²⁰⁾

素晴らしい王女であるエジプトとエチオピアの女王ニカウリスは、ソロモンの徳と英知の噂を聞いており、彼に関する名声が本当かどうかを自分の目で見たいと思った ...

ネルヴァルの「暁」とは違い、『ユダヤ古代誌』の日本語訳及びフランス語訳では、ソロモンとエジプトとエチオピアの女王の関係はあっけないほどあっさりしている。日本語訳が使ったギリシア語版では8巻・7章でソロモンは亡くなる。²¹⁾ フランス語訳では8巻・3章でソロモンが亡くなる。²²⁾

V. 結論

上記のようにネルヴァルの「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」とフラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』の記述を比較検討した。これによりネルヴァルがヨセフスを知っていたことを確認した。またネルヴァルが「暁」を執筆する際に、『ユダヤ古代誌』の記述を参考にした可能性があると言えるであろう。しかし「暁」は『ユダヤ古代誌』だけから影響を受けて執筆されたものではないことも理解できた。今回の比較検討は繰り返しになるが、ネルヴァルの作品、そして秦氏による『ユダヤ古代誌』日本語訳、最後にダルノー氏によるフランス語訳をテキストとして使用した。日本語訳の底本（ギリシア語版）とフランス語訳の底本には違いがある。この違いの原因は本文中で記述した。

今後の課題はネルヴァルが参照した他のフランス語訳を探すことである。本論文で使用したフランス語は日本語訳に比べると省略されている箇所がある。今回の検証作業で痛感したのは、ネル

ヴァルは多くの本の知識をもとに、彼自身のイマジネーションを駆使して、魅力的な登場人物を作り出したことである。

注

- (1) 『ネルヴァル全集Ⅱ』筑摩書房、1975年に収録された『暁の女王と精霊の王ソロモンの物語』中村真一郎・入沢康夫 訳、p.492 を参考にした。旧版の全集である。
- (2) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》1984, pp.1588-1589. 以下この巻を PL. II と略す。
- (3) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome VII-3, *Voyage en Orient II*, Paris, Classiques Garnier, 2022, p.811 において編者である Philippe Destruel 氏は1ページを使いアドニラムに関して詳細な説明を書いている。
- (4) PL. II, p.1097.
- (5) ネルヴァルの文章を訳す際に、『ネルヴァル全集Ⅳ 幻視と綺想』筑摩書房、1999年に収録された入沢康夫訳「幻視者 あるいは社会主義の先駆者たち」を参考にした。
- (6) PL. II, p.1751. 注(5)の翻訳では、文中に『ユダヤ戦記』を意味していると明記されている。
- (7) フラウィウス・ヨセウス、秦剛平 訳『ユダヤ戦記』第3巻、筑摩書房、ちくま学芸文庫、2002年、p.74. なお第1巻、第2巻ともに2002年に発行された。
- (8) フラウィウス・ヨセフス、秦剛平 訳『ユダヤ古代誌』6巻、筑摩書房、ちくま学芸文庫、2011年に収録された訳者解説を参考にした。英語圏における翻訳は詳細な説明が書かれているが、仏語圏の翻訳に関しては詳細な記述がないのが残念である。なおこの翻訳は第1巻が1999年発行、第2巻が1999年発行、第3巻が1999年発行、第4巻が2000年発行、第5巻が2000年発行、第6巻が2000年発行である。
- (9) アムステルダムで1700年に発行された書籍を引用する際、HJA と略すことにする。なおこの本の電子テキストの表紙には *reveu* と書いてあるのでそのまま表記した。
- (10) PL. II, p.671.
- (11) この文章を訳すために『ネルヴァル全集Ⅲ 東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された野崎歙・橋本綱 訳「東方紀行」を参考にした。
- (12) フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』3巻、筑摩書房、ちくま学芸文庫、1999, p.30. 以下この書籍を引用する際は、「ユダヤ3」と略すことにする。
- (13) HJA, p.190. 電子テキストでは227/843 である。
- (14) PL. II, p.671.
- (15) 「ユダヤ3」, p.36.
- (16) 「ユダヤ3」, p.38.
- (17) HJA, p.192. 電子テキストでは229/843 である。
- (18) PL. II, p.677.
- (19) 「ユダヤ3」, pp.61-62.
- (20) HJA, p.196, 電子テキストでは233/843である。
- (21) 「ユダヤ3」, p.73.
- (22) HJA, 200. 電子テキストでは237/843である。

(ませ れいこ:英語学科 教授)

